■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

24　加藤周一「部分と全体」

●参考　加藤周一『日本文化における時間と空間』【361/K31/1】（北野高校図書館）

■目標　「日本文化」の本質論を読み、自分たちの周囲の文化環境を捉え直す。

■追跡

ビッグネームの文章が続く。加藤周一は、戦後を代表する知識人、文学者。大学での専攻は医学、医学博士。思えば、かつてすぐれた知性は、文学を通じて世界を論じた。文学が世界を正しく深く写していたからだ。その一つの証左は、ノーベル賞の中に文学という分野が含まれていることだ。――しかし今も、文学の持つ本質的な力が薄れたわけではない。文学を通じて鍛えられた知性は、科学的知性と相補的に機能する。医学徒が文学者だった理由もそこにある。

（参考―日本大百科全書）

加藤周一（かとうしゅういち）（１９１９―２００８）

評論家、小説家。東京に生まれる。東京帝国大学医学部卒業。在学中の１９４２年（昭和１７）、中村真一郎、福永武彦（たけひこ）と押韻（おういん）定型詩の運動「マチネ・ポエティク」をおこし、また第二次世界大戦後いち早く中村、福永との共同執筆による時評風の評論集『１９４６　文学的考察』（１９４７）を刊行、注目された。続いて自身の戦争体験に基づいた小説『ある晴れた日に』（１９４９）によって戦後作家の位置を得るとともに、『文学と現実』（１９４８）、『文学とは何か』（１９５０）、『抵抗の文学』（１９５１）などの多彩な評論活動を展開した。１９５１年（昭和２６）フランスに留学するが、その成果として評論集『雑種文化』（１９５６）では、西欧文化を純粋とすれば日本文化は優れた伝統を基盤としての雑種文化とし、そこに文化創造の新しい可能性を予見するという卓抜した文化論を示した。

１９６０年、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学に招かれ、また７０年にはベルリン自由大学教授となり、日本との間を往復しながら文筆活動を続けたが、自然科学から人文科学に及ぶ広い視野、豊富な知識と教養、明晰（めいせき）で鋭利な論理によって、『二つの極の間で』（１９６０）、石川丈山（じょうざん）、一休、富永仲基（なかもと）をそれぞれとりあげた小説体の文化論『詩仙堂志』（１９６４）、『狂雲森春雨（くるいぐもりのはるさめ）』（１９６５）、『仲基後語（なかもとごご）』（１９６５）、小説『三題噺（さんだいばなし）』（１９６５）、『芸術論集』（１９６７）、回想録『羊の歌』正続（１９６８）、『言葉と戦車』（１９６９）、訪問記『中国往還』（１９７２）、日本美術論集『称心独語』（１９７２）、短編小説集『幻想薔薇（ばら）都市』（１９７３）などを刊行した。大仏（おさらぎ）次郎賞を受賞した『日本文学史序説』上下（１９７５、８０）では、西洋の影響を受けながら伝統を独自に築いた日本文学史を世界的な視点から論証し、一つの指標を提出した。

（立命館大学―加藤周一文庫）

加藤周一（一九一九―二〇〇八）は、戦後日本を代表する国際的な知識人である。知識人としての加藤の特徴は、もの

のごとを理解するに専門的な視点だけから見るのではなく、たえず全体的視野のもとに収めようとしたことにある。もうひとつの特徴は、科学者の合理的思考を身につけ、豊かな詩人の感性に満ちていたことである。加藤の書く文章には、論理的明晰さと詩的な美しい表現とが結びついていた。

加藤は、東京府立第一中学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学医学部に進学する。幼少時から読書に親しみ、小学時代に日本の抒情詩に惹かれ愛読し、中学時代に芥川龍之介を知り、『万葉集』に接する。大学時代に医学を学ぶかたわら、フランス文学研究室に出入りした。フランス文学者渡邊一夫の薫陶を受けてフランス文学への関心を深め、法律学者川島武宜（たけよし）の知己を得て、川島の主宰する勉強会にも参加した。

「戦争反対」を貫き、「少数派」として生きた渡邊、川島と接したことは加藤に深い影響を与え、加藤は戦時下の狂信主義から身を守ることが出来たのである。

敗戦直後には「原爆影響日米合同調査団」に加わり、広島で調査研究に従う。一九五一年にフランスに留学し、医学のみならず、文学、ことにフランス文学、さらにヨーロッパ美術、音楽、演劇、そしてヨーロッパ思想を深く学んだ。ヨーロッパ文化を知れば知るほど、日本文化を学びなおす必要性を痛感して一九五五年に帰国し、一連の「雑種文化論」を発表する。

一九六〇年から六九年までカナダのブリティッシュ・コロンビア大学で教鞭をとる。加藤自身がいうように、この十年間は「蓄積の時代」であり、日本文学史・美術史の研究を重ねた。その頃につくられた厖大な「研究ノート」は本文庫に収められる。その「蓄積」が花開くのは一九七〇年代から八〇年代にかけてのことであり、『日本文学史序説』や『日本　その心とかたち』を著した。

加藤の仕事は日本文化史研究だけではなかった。国内外の政治情勢や社会問題に対しても発言を続けた。「政治は嫌いである」といいつつも、加藤はたえず政治に関心を向けた。政治は黙っていれば、向うから押し寄せてきて、土足で入りこんでくるものだと考えていたからである。連載「山中人間話」や二四年間続けた連載「夕陽妄語」には、加藤の政治的信条がしばしば述べられたが、政治的無関心を厳しく排し、たえず権力と対峙しようとした。それにもかかわらず、加藤はいかなる権力からも遠くに位置し、多数派の意見に与することはなかった。そういう考え方をしていたからこそ、二〇〇四年に「九条の会」の呼びかけ人のひとりに名を連ねたのである。晩年の加藤は憲法九条の擁護に精力を注いだ。

加藤の思想と行動は、硬直することなく「しなやかさ」にあふれていた。いわば「二枚腰」の思想と行動の持ち主だった。だからこそ、どんな場合にも決して「希望」を捨てなかった。希望を捨てない限り「敗北」はないからである。

忘れてならないもうひとつの加藤の特徴がある。それは「人生を愉しむ」姿勢である。文学を愉しみ、美術や音楽や演劇に親しみ、友人との交流を悦んだ。どんなときにも「人生を愉しむ」ことをないがしろにすることはなかった。

「思うに憲法第九条はまもらなければならぬ。そして人生の愉しみは、可能な限り愉しまなければならぬ……」（加藤周一『高原好日』）

この姿勢こそが「加藤周一」である。

① 日本文化の中で読解問題１「時間」の典型的な表象は、一種の現在主義である。現在または「今」の出来事の意味は、それ自身で完結していて、その意味を汲み尽くすのに過去または未来の出来事との関係を明示する必要がない。時間の流れには一定な方向があるが、始めもなく、終わりもなく、歴史的な時間の流れは、特定の方向へ向かう無限の直線に似る。その中での出来事の前後を語ることはできるが、それ以上に時間の全体を構造化

して考えることはできない。／鎌倉時代に流行した絵巻物の一場面は、全体の話のすじから切り離しても十分に愉しむことができる。徳川時代から近代にかけて書かれた途方もない数の随筆集は、相互に関連するところ少ない断片的文章から成るが、個別の文章を全体から切り離して読んでも味わいが深い。それは『枕草子』以来『玉勝間』を通って今日に到る文学的伝統の一つである。そこには日本的時間の表象の著しい特徴が実に鮮やかに反映されている。

読解問題１　「「時間」の典型的な表象は、一種の現在主義である」とは？

まず、テーマとなる「現在主義」というキーワードが示される。問いは、それを確認させるもの。問いになっていなくても、当然確認すべきところ。**☆キーワードとその定義。**

説明としては、直後の一文を使うしかない。まだスタートしたところだし。**☆傍線部を延長**して、**☆なんやそのままやんか式**で答案の形を固めると、

「日本文化の中の時間は、典型的に一種の現在主義として表象されるということ。」

本文をコピペすると、「現在主義」とは、「現在または今の出来事の意味は、それ自身で完結していて、その意味を汲み尽くすのに過去または未来の出来事との関係を明示する必要がないという考え方」。

解答例「日本文化の中では、現在という時間の意味は、現在だけで完結しており、過去や未来のできごとと現在がどのように関係しているかを示す必要はない、と考えられているということ。」

表象、というニュアンスは、日本文化は、時間をそのように（現在主義として）表現している、という意味である。これを答案に繰り込んでもいいが、下手にすると失敗するかも。

絵巻物や随筆の例は、前後関係なく、断片として成立する作品の例である。和歌や俳句についても、同じことは言えるだろう。ここで注意しておくことは、この部分（例）については、筆者はやや肯定的にそれらを例示しているという点。一方、「時間の全体を構造化して考えることはできない」という言い回しは、批判性を帯びる。現在主義の限界を示している印象も含む。さて、議論はどう進むのか？

②　同じことは日常生活の習慣についてもいえる。日本文化の中では、原則として、過去は――殊に不都合な過去は――、「水に流す」ことができる。同時に未来を思い患う必要はない。「明日は明日の風が吹く」。地震は起こるだろうし、バブル経済ははじけるだろう。明日がどうなろうと、建物の安全基準をごまかして今カネをもうけ、不良債権を積みあげて今商売を盛んにする。もし建物の危険がばれ、不良債権が回収できなくなれば、その時

現在で、深く頭を下げ、「世間をお騒がせ」したことを、「誠心誠意」おわびする。要するに未来を考えずに現在の利益をめざして動き、失敗すれば水に流すか、少なくとも流そうと努力する。その努力の内容は、「誠心誠意」すなわち「心の問題」であり、**読解問題２**行為が社会にどういう結果を及ぼしたか（結果責任）よりも、当事者がどういう意図をもって行動したか（意図の善悪）が話の中心になるだろう。文化的伝統は決して亡びてはいない。

「ちくま」にきちんと取り組んできた人は、即座に丸山眞男の議論を思い出すことだろう。

「政治家の功罪に対する批判もどこまでも彼の政策が現実にもたらした結果によって判断さるべきであり、彼の動機の善悪は少なくも第一義的な問題とならない。政治家の責任は徹頭徹尾結果責任である」（丸山眞男「人間と政治」）

しかし、今挙げられている例は、すべて、政治家や経営者といった「結果責任を負うべき立場」の人間の実態である。悲しいけれど、今も（今こそ）この傾向は強まっている。これは、「現在主義」の悪い面である。

不都合な過去は水に流し、未来を思い患うことはない。過去や未来に責任を持つという原理から見ると、現在主義は多くの不幸をもたらす。

読解問題２　「行為が社会にどういう結果を及ぼしたか（結果責任）よりも、当事者がどういう意図をもって行動したか（意図の善悪）が話の中心になるだろう」とは？

☆傍線部を延長して、以下の部分を筋道立てて、書き直す作業になる。「その努力」の内容に注意。

「要するに未来を考えずに現在の利益をめざして動き、失敗すれば水に流すか、少なくとも流そうと努力する。その努力の内容は、「誠心誠意」すなわち「心の問題」であり、行為が社会にどういう結果を及ぼしたか（結果責任）よりも、当事者がどういう意図をもって行動したか（意図の善悪）が話の中心になるだろう。」

解答例「現在主義の発想では、現在の行為を最も重要と考えるので、未来の結果や失敗を生んだ過去への責任もあいまいにされる。そのため、行為の評価は、その結果ではなく、行為者のそのときの心のあり方に基づくことになり、そのときの意図や謝罪の態度さえよければよいと考えられる傾向を持つということ。」

丸山眞男（１９１４―１９９６）もそうだったが、加藤周一（かとうしゅういち）（１９１９―２００８）も、念頭にあるのは、日本の軍国主義とその結果に対する戦後の日本のあり方である。敗戦時、丸山は三十、加藤は二〇代半ば。その時代の悲劇と変化と屈折

を直視した世代である。東大の法科と医科出身。同輩や周囲の仲間が戦争で死んだ世代である。そして彼らの知性は、そもそも戦争遂行に疑問を抱いていた。

この戦争が継続したら、どのような惨禍が待ち受けているか。それを合理的に推定することはできたが、人々はそれに目をつぶった。目をつぶらされた。あの戦争がいかにもたらされたか。その責任はどこにあるのか。かれらはなぜ死なねばならなかったのか。愚劣な作戦を立てた連中はのうのうと生き残り、何の責任も負わない。――加藤らに代表される戦後の言論には、こういった切実な糾弾の思いが響いている。

この無責任な現在主義は、今も残る。「文化的伝統は決して亡びてはいない」。

たとえば、原発事故。

津波による全電源喪失の危険は指摘されていた。しかし、当事者たちは、見ないふりをした。そんな起きるかどうかわからない先のこと、どうかなるさ、と無視した。そして、事故が起き、日本が崩壊するほどの危険に陥れたあげく、偶然に救われて時間がたてば、再稼働だ、原発建設の輸出だ、と過去を「水に流す」。同型の愚劣が繰り返される。

加藤の論は、この愚かな反復の根に、現在主義という名の日本文化を見ているのである。

ただし、この悪い面での現在主義は、社会システムという、多くの人間が幸福に暮らすために設計されるべき次元において、特に現れるということに注意しよう。「社会」は、ある領域に生活するたくさんの人間の単位が、過去から未来にかけて、安定的に継続できるように設計されるべきものである。政治も経済も技術も、よりよい結果を求めて、その設計に参加する。失敗もあろう。しかしそのときは、システムは組み替えられ、進化しなければならない。

このことと、個人が過去にとらわれ、未来に不安を感じ、現在を台無しにしてしまう、あの実存の次元を混同してはならない。

③　始めなく終わりない時間のもう一つの表象は、時計の針のように循環する時間である。そこでは出来事が一回限りではなく、何度でも起こる。冬来りなば春遠からじ。しかしここで注意する必要があるのは、出来事の一回性の否定は、必ずしも現在の出来事への注意の集中を弱めるのではなく、むしろ強めるように作用してきたということである。今年の冬が去年の冬と変わらぬとすれば、今年の冬を知ることで同時に去年の冬を知ることができる。その方が記憶に頼るよりも正確だろう。同じような春がくり返されるならば、現在の春の観察は未来の春の予見に通じる。循環する季節は、過去および未来のすべての季節の現在化を意味する。俳人の季語は、過去・現在・未来のすべての季節を示す。例は挙げるまでもないだろう。時間の「全体」は、現在＝今が無限に連なる直線、または無限に循環する円周である。それぞれの現在＝今は、その全体の「部分」であり、相互に等価的であるとすれば、日本文化の伝統が強調する現在集中主義は、全体に対する部分重視傾向の一つの表現と解することもできる。そこでは全体を分割すると部分が成り立つのではなく、部分が集まると全体が結果する。

「もう一つ」という語から、次の構造が推定できる。

・始めなく終わりもない時間　①過去未来と断絶した現在主義の時間
　　②循環する時間

そして、この①②が接続する。

風土がもつ、わかりやすい季節の循環性が背景にあるのか、日本列島の住民は、また同じ春が来る、といった感覚をもつ。一九八四年の春、といった一回性ではなく、二〇〇〇年の春も、二〇〇一年の春も、春は春。等価な春。今は春、春は今。

その今が、今＋今＋今＋今＋今＋今＋今＋今…と続き、円となって循環する。それが日本文化の時間のイメージだというのである。①＋②は、循環する今、という表象である。

ここで時間のイメージが、空間のイメージ接続する。

円環が全体だとすると、今は部分。その今という部分が重要。まず今がある。今しかない。部分しかない。まず全体があるのではない。あるのは部分＝ここ。それが連なって全体となる。――ここに欠落するのは、全体を見る視点。ドローンみたいな視野。

④　「空間」の全体は無限の広がりである。部分は「ここ」、すなわち「私の居る場所」である。その場所は、典型的にはムラ共同体であり、境界は明瞭で、境界の内と外の二つの空間がムラ人にとっての世界の全体を作る。ムラの領域は世界空間全体を分割した結果ではなく、ムラの集まりがクニを作り――クニが何を意味するかはさしあたりの問題ではない――、空間の全体はクニの外部の無限の広がりとして与えられたものである。私の住む場所＝「ここ」がまず存在し、その周辺に外側空間が広がる。外側空間の全体は、所属集団の内側と直接の取り引きをもつ特定の面（たとえば仏教や工芸）を除けば、強い関心の対象ではなかった。八世紀の初めに『古事記』を編んだ人々は、もちろん朝鮮半島の三国・唐・天竺の存在を知っていたにちがいない。しかし『古事記』の冒頭に掲げた創造神話は、日本列島の創造だけを語って、その外部
の地域の創造には一行も触れていない。一八世紀後半オランダ製の世界地図が輸入された後になっても、『古事記』解読の代表的な学者本居宣長の世界観は、「神代記」のそれから根本的に異ならなかった。宣長の住んでいた所＝「ここ」が世界の中心で、その中心に係わる限りで周辺部（朝鮮半島や中国やオランダなど！）が存在する。**読解問題3**まず世界の全体が成立し、その中に部分としての各国（たとえば日本！）が位置づけられるのではなかった。

読解問題3　「まず世界の全体が成立し、その中に部分としての各国（たとえば日本！）が位置づけられるのではなかった」とは、どのようなことか。

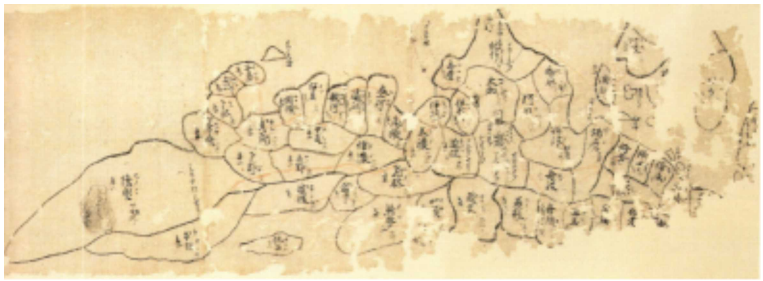
ではどうだったの？と問い直して、その答えを書けばいい。

「私の住む場所＝「ここ」がまず存在し、その周辺に外側空間が広がる」と「宣長の住んでいた所＝「ここ」が世界の中心で、その中心に係わる限りで周辺部（朝鮮半島や中国やオランダなど！）が存在する」が対応する。

傍線部は、日本という国の位置づけを論じているので、ここ＝日本、として書く。

解答例「自分のいるところである「ここ」としての日本がまず存在し、その日本が世界の中心だと考え、その中心に関係のある場所をその周辺に位置づけるだけで、世界全体の中での日本の位置を考える発想がなかったということ。」

これはグーグルアースみたいなものを通じて、日常的に地球全体のイメージを見ている（つもりになっている）グローバル時代の人間には想像もつかない。しかし、昔の日本地図を見ると、各国が、細胞のように膨らんだ形で描かれている。これは、内側（ここ）という範囲を中心に、空間を捉えていたことを如実に表している。



仁和寺蔵日本図（１３０５年）

⑤　個人の所属集団は必ずしも国家（日本）だけではない。徳川時代の武士層にとっては主として藩、自作農にとっては主としてムラ、大きな商家にとっては堺や大坂の町人社会

であったろう。明治以後に発達した都会の中産階級は、彼らの「アイデンティティー」の根拠を所属官庁や大企業にもとめていた。それぞれにそれぞれの「ここ」で生き、働き、取り引きし、連帯し、競争していた。「ここ」は伸縮し、重層する。家族から国家まで、「ジェンダー」から世代まで、一人の人間は多くの異なる集団に属するが、それぞれの集団の領域を「ここ」として意識する。「ここ」から世界の全体を見るのであって、世界秩序の全体からその一部分＝日本＝「ここ」を見るのではない。その構造、すなわち部分が全体に先行するものの見方は、敗戦と占領後の二〇世紀後半に変わったろうか。例を日本国の対外的態度にとれば、根本的に変わったようにはみえない。

「ここ」から世界の全体を見る。世界秩序の全体からその一部分＝「ここ」を見るのではない」というテーゼを確認しておこう。

それは地理的なイメージだけではなく、「アイデンティティー」のイメージとしても同じ。自分は誰か、は、自分はどこに属しているか、に代替される。〇〇藩の〇〇でござる、というレベルもあれば、〇〇家のだれそれ、というのもある。そのときに問題となる所属集団の立場に立って、そこを根拠として、利害を考える。あるときは、〇〇部の人間として、××部と相対する。あるときは、〇〇高校を内部とし、そこにいる人間として、外部である××高校と対抗する。

私は市民だというとき、彼は社会全体の公正を考えるという超越的な視点に立っている。このことは、現代文の教科書でも学んだ。市民的な視点と、今ここからの利害に立つ視点とは、対照的な関係にある。

⑥　国際的な問題を解決するために、各国は自国に有利な解決策を主張する。そのための手段は、大きくみれば、三つあり得るだろう。第一の手段は、力ずくで自説を他国に強制することである。これは帝国主義的な態度である。必要とされる力は主として経済力や軍事力であり、これらの力のどちらかまたは双方が圧倒的でなければならない。それほど強大な力は、二〇世紀後半の日本国にはなかった。第二の手段は、自国の利益に直接係わる場合にのみ問題の領域に介入し、国益を強く執拗に主張する外交である。これは国際問題に対して日本国がとって来た典型的な態度である。たとえば米国との「貿易摩擦」、ロシア（旧ソ連）との「北方領土」交渉。第三の手段は、直接に国益を主張するのではなく、問題の領域全体について、複数の可能な解決法の中から国益に有利な方策（国際的秩序の一つ）を択んで提案することである。旧ソ連も、米国も、中国も、ＥＵもしばしばそういう態度をとった。日本の対外的態度がなぜ第三手段よりも第二手段に著しく傾いたか。個別の場合にはそれぞれ複雑な条件がからんでいることは言うまでもないが、半世紀の歴史をふり返ってみれば、大きな背景は日本国の視線が国の外部よりも内部へ向かっていたということに要約されるのではなかろうか。すなわち関心の中心は「ここ」＝日本にあり、その日本を部分として含むところの世界＝全体ではなかった。「ここ」文化の伝統は今も

生きている。

「超国家アメリカ」にもあったように、「帝国主義的」な態度は、暴力の拡大延長策。かつての日本もそれを目指した。加藤は、限定的な第二の手段を日本の選択といっているが、いまや。それも崩壊し、米ロのいいなり状態である。第四の視点として、国連の視点がある。日本こそ、その視点を活用すべきと思われるが、そうならず、自閉していくように見えるのは、「ここ」文化が、いかに根深く、執拗か、ということを表している。

⑦　かくして「ここ」の文化も、「今」の文化と同じように、部分と全体との関係に還元される。別の言葉で言えば、部分が全体に先行する心理的傾向の、時間における表現が現在主義であり、空間における表現が共同体集団主義である。部分と全体との関係において、「今」文化と「ここ」文化は出会い、融合し、一体化して、「今＝ここ」文化となる。夢幻能の舞台のように。

「今＝ここ」文化という概念が提示された。時間的にも、空間的にも、ここという特殊な場所に閉じていこうとする文化である。筆者の筆は、これが悪く出た場合の例を連ねる。結果に対する無責任（現在主義）。領域全体に対する無責任（共同体集団主義）。今だけよければいい。自分たちだけよければいい。政治の中枢がもはやそうなっている。その弊害が、司法やマスメディアや、社会のあらゆる領域に感染している。――庶民は、そうでも、かしこくエライ人はもっと天下国家のことを考えてくれていたはずなのに――

⑧　夢幻能の舞台では、磨かれた木の床の上に何もない。ただ静まりかえった静寂だけがその空間を支配している。そこへ、静かな空気を引き裂くように、あの鋭い笛が響く。一瞬に起こり、一瞬に消える笛の音。その音には登場人物たちを揚げ幕の奥から、はるかに遠い過去から、舞台へ抽き出す力がある。舞台は忽ちかつての宮廷の庭や、壇ノ浦の戦場となる。主人公たちは思い出を語るのではなく、そこで、今、許されぬ恋にもだえ、舟上で長刀をふるうのである。彼らは舞う。舞いは一瞬の姿から他の姿へと移り、それぞれの姿が濃密な、決定的な、それぞれの時間の表現になるだろう。せまい空間の中での一瞬の経験はどこまでも深めることができるし、その表現はどこまでも洗錬することができる――ということを能舞台は示す。観客は歴史的興味からそこへ集まるのではなく、現代劇を、すなわち彼ら自身の劇を見るために集まるのである。彼ら自身の劇を見るとは、「今＝ここ」文化を自ら定義するということである。

能の登場人物は、今ここで、もだえ、怒る。能は優れた形で、今ここ、をそこに映し出す。遠い昔のことではなくて、夢の中でトラウマにうなされるように、悲劇は今ここで起きている。

能なら、それは、そういう怨霊を抱える自分を「見る」ことで、ある種の浄化作用を得られるだろう。

しかし、集団で犯した歴史的犯罪というトラウマを、「今＝ここ」文化はどのように処理するのだろうか。なかったことにする。なかったと強弁する。おれは悪くなかったと言いつのる。その病理が今、吹き出している。

■読解問題

1　「「時間」の典型的な表象は、一種の現在主義である」とは、どのようなことか。

2　「行為が社会にどういう結果を及ぼしたか（結果責任）よりも、当事者がどういう意図をもって行動したか（意図の善悪）が話の中心になるだろう」とは、どのようなことか。

3　「まず世界の全体が成立し、その中に部分としての各国（たとえば日本！）が位置づけられるのではなかった」とは、どのようなことか。

■発展問題

ブッダは、今ここに生きよ、と説いた。今ここにある自分に気づき、過去や未来へのとらわれから解放されること。このブッダの教えと、加藤の「今ここ」文化はどう違うのか、次の文章も参考にして論ぜよ。

（日本テーラワーダ仏教協会ホームページより）

私たちはいまこの瞬間を生きているという現実を、理屈の上では十分理解しています。

しかしそうした現実のなかで、いまこの瞬間を生きながら、心では過去に起きた出来事や思い出などの想念を膨らませているのです。過去に起きたことに悔やんでみたり、悩んだり、あるいは喜んだりしていますね。その一方で、いまこの瞬間のことを判断し、行動しようともします。どちらのあなたが実在なのですか。心は実在しない架空の過去を彷徨さまよっているのですから、この人はいまこの瞬間を確実に、正しく生きているとは言いかねます。「いま、ここ」に存在することも、「いま、ここ」に起こる現象もありのままに、正確に理解し、体験することも出来ないという状態にあります。いまこの瞬間に起こっていることを理解できないのは死人と同じではないですか。

また心は未来へも走りだします。「いま、ここ」に生きているのに、これから先のことについてあれこれと考えたり、想像したり、妄想したり、心配したり、悩んだり、苦しんだりしています。

あるいは未来に勝手な夢想や空想をします。それでは現実のなかで、「いま、ここ」に確実に生きているということが至極曖昧になってしまいます。いましなくてはならないことを完全に行うことが不可能になってしまいます。自分にいま起こることを気づかないと

いうのは、これも死んだ人と同じと言われても仕方がありません。

過去は過ぎ去ってしまったのですから、いまさらどうあがいたところでどうすることもできません。「過去の良いことを思い出すのは楽しいではないか」と反論しても、過去の「いい思い出」に舞い上がって妄想に耽っていると、ますます「いま、ここ」という実存に正しく生きることが出来なくなってしまいます。過去が楽しいということは、現在が不満であるというのと同意語です。

では未来についてはどうでしょう？

未来、これはまだ起こっていない現象であり、いくら想像したところでその通りになるとも判りません。未来はそのときの因果関係、状況、条件などによって決められていくものですから、想像するだけ時間の無駄というものです。しかも、想像以外のことが起こったときには、それに立ち向かっていけなくなってしまうではないですか。どんな状況にも立ち向うには常に心は「いま、ここ」にあるべきです。

「いま」この瞬間にあって常に混乱のない、迷いのない、過去や未来などの妄想に酔いしれず、溺れない状態にあること、聡明でいること。

「いま」自分の体に起こること、自分の心に起こることを確実に知って、正しく行動すればいいだけなのです。「いま、この瞬間だけだったら、何とか頑張れる。何とかできる」そうは思いませんか？

「いま」自分が、聞く、見る、味わう、嗅ぐ、触る、考える、話す、行動する－要はこれだけのことなのです。そういう人間の「いま、この瞬間」によく気がつく、正しく認識して生きる－悩みや苦しみがなく完全に生きることなのです。

この生き方をすれば徐々に真理の世界が見えてきます。存在の謎が解けてきます。いっさいの疑いや迷いがなくなってきます。心の汚れが清められ、煩悩に支配されていた心は解き放たれ、心を縛っていた悪い束縛からは徐々に解放されていきます。さらに、生死の循環である輪廻からも脱出できるようになってきて、必然的に解脱への道が大きく開かれ、ついには解脱を体験できるようになっていくのです。

●重要語「今ここ」＝本文にあったように、「今ここ」とは、「時間」と「空間」が一体になった表現である。キリスト教文化圏でも、「今ここ」に集約される「個」という発想はある。しかしその「個」は、普遍的で超越的な存在＝神との関係の中で位置づけられている。神は上方から一人一人と結びついている。一神教の時間概念は、「また春が巡る」というようなものではなく、神が宇宙を作ったはじめがあり、最後の審判が下される最後の時がある、という始点終点を持つ直線である。それに対し、本文での「今ここ」文化には、一回きりの今、という発想も、絶対的な場所としての「ここ」という発想もない。一点に集約される神の視点を欠いているのである。